第四章　広尾原枯れ尾花（かれおばな）

一

腹を空かした坂崎磐音は布団の仲で思案していた。

茶色に染まった障子越しに差し込む夕暮れ前の光も張るののどけさが漂っていた。

（明日の朝まで我慢するか、蕎麦でも食いに出るか）

大の男が深刻に考えることではない。だが、懐に二十六文しかないとなると考えざるをえない。

「坂崎さん、いる」

おこんの声がした。

「いますと」

腰高障子が開けられ、

「あれ、風邪でも引いたの」

と両替商今津屋の奥向きの女中で、金兵衛の娘のおこんが狭い土間で立ち竦んだ。

磐音はのろのろと起き上がり、夜具を部屋の隅に引きずっていった。

「いや、風邪ではない。腹が減らないように横になっていただけだ」

「呆れた」

と呟いたおこんが、

「これじゃあ、仕事があってもできそうにないわね」

と言った。

「いや、仕事ならばちゃんといたす」

「両国橋を渡って今津屋まで生けば御飯食べられるわ」

「仕事もせずに飯だけを馳走してもらうわけにはいかん」

「だから仕事と言ったでしょ」

さようかと答えた磐音の言葉に喜びが溢れた。

慌てて裾のほつれた袴を着けて髪をてで撫で付ければ、それで支度が終わりだ。

備前包平二尺七寸と無銘の脇差しを帯に差し落として、長屋の路地に立って待つおこんに、

「おまたせいたした」

と声をかけた。するとおこんが、

「上野伊織様からの手紙…」

と差し出した。

「おお、これはわざわざ届けていただいて相済まぬ」

受け取った封書（ふうしょ）を差し上げて感謝した磐音は懐に仕舞った。

「坂崎さん苦労するわね」

「苦労は買ってでもせよと申すが、こう続くとなあ」

のんびりと答える磐音の顔をおこんが覗き込み、顔を横に振った。

「蝋燭屋の明石屋さんもお金になったとは思えないけど…」

「なにしろ約束された主どのが死ぬか生きるかの瀬戸際（せとぎわ）ではな、日当を払ってくださいとも言えぬ」

「取りはぐれたな」

「品川さんが恐縮しておった」

明石屋の騒ぎは読売（よみうり）で報じられたのでおこんも知っていた。

「うちの老分番頭さんも、坂崎はなかなかの人物だが、最後の詰めが甘いといつもおっしゃっているわ」

二人は両国橋に差しかかった。

まだかすかな残光が橋と川面（かわも）の間に漂い残っていた。

二人連れの職人が道具箱を担いで、西から東に家路（いえじ）を辿り、小僧に荷を担がせた番頭が店へと戻る。鬢付け油（びんつけあぶら）の匂いをさせた髪結い女は得意先から戻るところか。

川面には、木材（もくざい）を組んだ筏（いかだ）や、俵を積んだ荷足舟（にたりぶね）、吉原通いの客を載せた猪牙舟が行き交っていた。

橋を渡って両国西広小路を抜ければ、六百余軒の両替商でも一、二を争う今津屋の分銅（ふんどう）看板が見えた。むろんまだ店の大戸は開いていた。

「老分さん、お連れしましたよ」

おこんが大勢の奉公人を仕切る大番頭の由蔵に声をかけた。

両替商の雇い人（やといにん）は特別な呼び名があった。

丁稚（でっち）、振場役（ふりばやく）、秤方（はかりやく）、帳合方（ちょうあいかた）、支配人、そして、最後に昇りつめるのが別家（べっけ）格を許された老分だ。

「おお、来なさったか」

「老分どの、早速お世話をかけたな」

のんびりと手紙の礼を述べる磐音をおこんは奥へ連れ込んだ。連れて行かれたのは広い台所で、大勢の奉公人のための夕餉が行われていた。

「はい、そこに座って」

深川育ちのちゃきちゃきした言葉遣いそのままに、おこんが一つだけ用意されていた箱膳の前に磐音を座らせた。

膳にはすでに鰆（さわら）の焼き物やら鶏と里芋、人参などの煮物などが並んでいた。

「おこんさん、馳走になってよいのか」

「腹が減っては戦もできないわ。番頭さんのお供でお仕事ですからね、たんと食べてくださいな」

「なれば遠慮なくいただく」

磐音は箸を持った両手で合掌（がっしょう）して食べ物に感謝すると、まず味噌汁の椀（わん）を取り上げた。

こうなるとだれが声をかけても上の空（うわのそら）だ。

「出が出だもの、鷹揚（おうよう）なもんだわ」

おこんの言葉ももはや磐音の耳には届かなかった。

「いいこと、食べたら奥に来て」

おこんが顔を突き出していった。

「相分かった」

磐音は無意識のうちに返事をするとたべることに没頭していった。

満腹した腹を抱えて台所を出るとおこんに、

「はいはい、こっち」

と男の髪結いが待つ部屋に通された。

「へえ、こちらに」

無精髭を当たられ、髷をゆい直された。さらには別の座敷に連れて行かれて、

「これに着替えるの」

とお納戸色（なんどいろ）の真新しい羽織袴を差し出された。

「着替えねばならぬほどのところへお供をするのか」

「うちのお客様は大名、高家（こうけ）旗本が多いの」

はあと空返事をした磐音は、埃臭い袷から真新しい衣服に着替えた。

「はい、これ」

と白扇（はくせん）までおこんに持たされ、前から後ろから子細（しさい）に点検されて、

「これならば立派な若様だわ」

と呟いた。

「おおっ、これならどちらが供か分かりませんな」

角樽（つのだる）を提げた小僧の宮松を伴った由蔵も言う。

「行ってらっしゃいまし」

支配人らの見送りを受けて、由蔵と磐音らは外に出た。

三人は神田川右岸（うがん）を遡った。

「坂崎様には説明の要もないと思いますがな、両替屋の商いの一つに、金を預かっては運用する、また金を貸し付けては利息を頂戴するという預かり金無利子、

由蔵が不意に言い出した。

小僧が離れて歩いていた。

「うちの貸付は商いをなさる店が多いのですが、中には高家旗本もございます。これから訪ねる元中奥御小姓衆の岡倉美作守（おかくらみまさかのかみ）様三千七百石もその一つにございます。先代は御小姓衆としてなかなかの人物、羽振りもようございました。ところが当代の恒彰（つねあき）様は、遊び好き、酒好きが高じて交代寄合入りに落とされた。御役がつくとつかないとでは極楽と地獄です。恒彰様はこの五年内に今津屋から八百五十両の借財をなさておられます。いえ、これには利息が入っておりません」

「さすがに今津屋どの、鷹揚なものですな」

「鷹揚なものですか。ない袖は振れぬと居直られると、直参（じきさん）旗本、なんとも手の打ちようがございません。ところがな、甲府勤番支配に就かれて支度金が出たという話を小耳にしましてな、幾分でもご返却をと参るところにございますよ」

由蔵は神田川に架かる昌平橋で左岸に渡り、聖堂脇の坂を上がりつめて水道橋の袂（たもと）の長屋の前で足を止めた。

玄関の傍らには乗り物が三挺まっていた。

由蔵が玄関番の若侍に名乗ると奥に引っ込んだ。が、すぐに初老の用人と戻ってきた。

「おお、これは今津屋の番頭ではないか」

用人はちらりと小僧の抱える角樽（つのだる）を見た。

「この足袋、御役に戻られたとお聞きいたしました。おめでとうございます」

「さすがは今津屋、耳が早いな」

「御城の動きをだれよりも早く察知できなければこの商いはできませぬ」

「そうかそうか、今も殿様はお仲間衆と祝酒を飲んでおられる。ささ、こちらに上がるがよい」

由蔵は玄関に小僧を待たせ、角樽を持とうとした。

「それがしが」

磐音が手を出した。

用人は侍姿の磐音を困ったように見たが、何も言わずに廊下の奥へと案内した。

庭に面した二間続きの座敷では行灯（あんどん）の明かりが皓々と点され、四人の武家と柳原辺りから呼ばれた様子の芸者衆が宴会の真っ最中であった。

鳴り物がやんだ。

「おお、今津屋の番頭か」

巨漢の岡倉美作（みまさか）守恒彰が老化に平伏した由蔵を見た。

「殿様、この足袋は御役にお就きになられたそうで祝着（しゅうちゃく）極にございます。

「由蔵、御役だと。甲府へ山流しだぞ」

甲府城は柳沢吉里が大和に藩替えになって以来、幕府が直轄（ちょっかつ）管理した。

江戸育ちの旗本は山に囲まれた甲府勤番を山流しと称して嫌った。

「とは仰せられますが、お役料千石、実入りは悪くないと聞き及んでおります。それに甲府勤番を勤め上げれば、御小姓組番頭に抜擢（ばってき）されます。」

「なにが抜擢か、もともとわが岡倉家は小姓組番頭の家柄であったわ」

不機嫌になった恒彰は、

「今津屋、祝を受け取った」

と用事は済んだという顔をした。

「殿様、お楽しみのところまことに申し訳ございませんが、ちと別室にてお時間を頂きとうございます」

「なにっ、座を替えろともうすか」

「いえ、ほんのしばらくにございます」

「番頭、この場にて申せ。ここにおるのは親しき朋輩ばかり…」

「いえ、ここではすこしばかり差し障りがございます」

「言えぬと言うか。ならば後日（ごじつ）にいたせ」

恒彰は由蔵の要件が分かった上で無理を言っていた。

「それではこちらの商いが立ち行きませぬ」

「なにっ、番頭、そなたは祝いに駆けつけたと思うたか、金の取り立てか。酒がまずうなるわ、帰れ帰れ！」

そこまで言われた由蔵は、居住まいを正した。

「殿様、うちは金子（きんす）をお貸しして利息をいただくのが商いにございます。むろん期限付きの約定を交わしてございます。こちら様にはこれまでかなりの額の金子を用立ててございます。それが期限が過ぎても元金どころか利息の一分すらご返却頂いておりません。御役に就かれたとお聞きして、融通した金子を幾分でもとお願いに上がった次第…」

顔を青くした用人が由蔵の袖を引っ張った。

が、由蔵も今津屋の別家格まで登りつめた男だ。梃子（てこ）でも動く気はない。

「面白い！」

と手にしていた大杯を投げ捨てた恒彰が、

「今津屋、用心棒まで連れて借金の催促か」

磐音を睨んだ。

が、磐音は飯をたらふくいただいたばかり、幸福そうな顔でニコニコと笑っていた。

「よかろう、払ってやろう」

「ありがとうございます」

「その前にひと差し舞うのを見物せい！」

よろよろと立ち上がった恒彰は立て切られた襖（ふすま）を開け、長押（なげし）にかけられた黒柄の槍を掴むと小脇に抱え、革鞘を抜き捨て、宴の中央に仁王立ち（におうだち）になった。

「番頭、ようみておれ。少しでも動くと岡倉家伝来の青龍切り、自慢の穂先（ほさき）の田楽刺しになるぞ」

芸者たちが慌てて隣室に引いた。

由蔵は微動だにしない。

「酒は飲め飲め飲むならば、日の本一のこの槍を、飲みとるほどに…」

ヨロヨロとした恒彰が、由蔵の眼前に穂先を突き出した。

穂先が行灯の光にきらめいて、由蔵の体の三、四寸手前でなんとか止まった。

「岡倉様、お相手つかまつる」

おこんが持たせた白扇を手に磐音が立ち上がり、穂先の前に身を晒した。

「用心棒風情めが！」

恒彰が槍先を磐音に向けた。

「そのほうが望んでの舞じゃ。死の舞になっても知らぬぞ」

恒彰は存分に槍を手元に引きつけると磐音の胸に繰り出した。

磐音の白扇も舞動いて、びたりと槍の千段巻（せんだんまき）に当てられた。

「おのれ！」

恒彰は槍を手元に引こうとした。だが、どうなっているのか、白扇をぴたりと千段巻に当てられた槍はびくとも動かなかった。

恒彰が強引に引き抜くと、よろめく体勢も構わず、磐音の胸を本気で刺し通す気で突き出した。

磐音の扇子が踊って、穂先を叩いた。すると黒柄の槍が庭に向かって飛んでいった。

呆然と立ち竦む恒彰に、

「岡倉のどの様、座興（ざきょう）はこれまでにお願いいたします。わが連れは神田三崎町の佐々木玲圓道場で修業を積んだ者でこざいます」

と由蔵が言い放った。

「何、直心影流佐々木道場か」

若い旗本が片膝を立てて刀を引き寄せた。

「今津屋、こ、こちらに参れ、殿は最初から金子を用意されておられたのじゃ」

と用人はその場を言い繕うと、由蔵と磐音を従えて座敷を離れた。

「さすが板崎様、お陰さまにて三百両を返して頂きました」

緊張を解いた由蔵が言い出したのは昌平坂にかかる辺りだ。

宮松の持つ提灯の明かりがちらちらと道を照らした。

「冷や汗をたっぷり買いましたよ。あれで三百両ではとても間尺（ましゃく）に合いません」

「いや、まだ終わってはおらぬようです」

足音が三人の後方に響いた。

岡倉家の宴にいた若い旗本と岡倉家の家臣だろう、五人が追いかけてきた。

宮松が堀端に逃げた。

それでも提灯の明かりを保持していた。

「座興はお屋敷で住みました。江戸市中で刀を振り回しては、お旗本の沽券にかかわりますぞ」

由蔵が諌めた（いさめる）。

「問答無用」

若い旗本が剣を抜いた。

「あれを見逃しては我ら直参の面子（めんつ）に関わる」

「およしなさればよいものを…」

そう言った由蔵が小僧の傍らに身を引いた。

「宮松、しっかりと明かりを照らしなれ」

磐音は五人の前に春風に吹かれる柳のように立っていた。

「参る！」

若い旗本が正眼に剣を構えた。

四人の仲間は後詰（ごづめ）に回るつもりか、その背後についた。剣の柄に手を置いていたがすぐには抜く気はないようだ。

磐音は備前国の刀鍛冶（かたなかじ）包平が鍛えた業物二尺七寸を抜く峰に返した。

「小馬鹿にしおって！」

罵りの言葉とともに怒涛のように押し寄せてきた。

道場剣法ながら腕に覚えがあるのであろう。

なかなかの太刀筋で正眼の剣が伸びて、磐音の小手にきた。

磐音も走りざまに迎え撃ち、峰に返した包平ですりあわせた。

相手の剣の攻撃がふわりと絡めとられた。

剣の勢いがそがれた（殺ぐ）。

相手は磐音の胴にとも攻撃を連鎖させた。が、それも次々に受け止められた。

肩に上げた剣が磐音の肩口に落ちてきた。

大包平が真綿で包むように応じた。

「おのれ！」

磐音は連続した攻撃を受け止めるだけで反撃しようとはしない。

若い旗本は顔を朱（あけ）に染めた、磐音の肩を右に左に疾風（はやて）のように襲撃した。そのことごとくが受け止められ、やんわりと跳ね返された。

「くそっ！」

叩きつけるように最後の一撃を振るった相手は、磐音が受け止める反動を利用してくるりと体勢を入れ替え、間合いを取った。

一間半。

荒い息遣いが昌平坂に響き、宮松の持つ提灯の明かりに若い剣士の顔が泣き顔のように歪んだのを由蔵は見た。

八双（はっそう）の構えを取った若い剣士は、一撃必殺の攻撃を覚悟した。

「おおおっ！」

雪崩れるように突進しながら八双の剣を磐音の眉間に叩きつけてきた。

低い姿勢で走り迎えた磐音が大包平を虚空にすりあげた。

峰に返された剣が初めて受け止めた。

振り下ろされる剣とすりあげられた剣が虚空で交わった。

火花（ひばな）が散った。

キーツ！

という乾いた音が響いた。

若い剣士の剣が柄本（つかもと）から折れて、神田川へと飛んでいった。

「これまで！」

磐音の声が凛然と響いた。

折れた剣を持つ剣士も後詰（ごつめ）の四人も呆けた（ほうけた）ように立っていた。

磐音は由蔵と宮松を無言で促すと、昌平坂を駆け下がっていた。

二

おこんの淹れた茶を由蔵と磐音は黙って啜った。

二人は今津屋の老分の用部屋に向かい合っていた。

「ふーう」

と吐息をついた由蔵が、

「二度も命を拾いました」

としみじみ本音を呟いた。

「坂崎さん、なにがあったの」

おこんが訊いたとき、主の吉右衛門も用部屋に顔を見せた。。

「これは旦那様」

由蔵が青い顔をして戻ってきたと奉公人から知らされて、吉右衛門も顔を見せたのだ。

座り直した由蔵が岡倉屋での出来事の一切を主に報告した。

行きがかり上、おこんも同席して聞くことになった。

話を聴き終えた吉右衛門は、

「先代はなかなかしっかりした人物でありましたが、当代の恒彰様は…」

と嘆息した。そして、言い出した。

「老分さん、恒彰様が甲府に赴任なさるまで何があるか知れたものではありませんぞ。念のためです、坂崎様に待機してもらいましょうかな」

と言い出した。

「それはよろしゅうございますな」

由蔵が磐音を見た。

（ありがたい）

と喝采を叫びながら、無言で頭をさげた。

「またよろしゅう頼みますぞ」

細かいことは由蔵と相談してくださいと言い残し、吉右衛門が奥に戻っていた。

おこんが由蔵の遅い夕餉の用意をするために台所に下がった。

「老分さん、日夜を店を守るにはそれがし一人ではおぼつかぬ。品川柳次郎ら仲間を一人二人雇ってようごうざるか」

「差配（さはい）は坂崎さんおお任せしますでな、ご自由に」

と答えた由蔵が、

「ただ竹村さんはどうも…」

と顔をしかめた。

竹村武左衛門は今津屋を襲った南陵二朱銀騒ぎの時、磐音や柳次郎とともに今津屋に雇われて働いていた。

その折り、敵方（てきがた）に雇われた剣客二人に襲われて背中を切り割られ、浅草中の御門の医師厳原河伯（いずはらこはく）のもとに担ぎ込まれて、一命を取り留めた。

怪我が全治する間、今津屋では竹村の治療代のほか、妻女の勢津（せつ）と四人の子供たちの暮らしの面倒を見てきた。

その傷も癒えた竹村はいつもの浪人ぐらしに戻っていた。

「竹村殿がなにか」

「はい、時折り店に顔を出されて、仕事はないかと申されましてな。いえ、金子を強請る（ゆする）ようなことは一言も申されませんが、家計が苦しいと切々と訴えられましてな。その都度（つど）、なにがしかのものをお渡ししてきました。なあに金子は大した額ではありません。ただ、坂崎様や品川様と違って、武士の気概を忘れておられるようでな」

「…それは気が付かぬことでした」

磐音も驚いた。

なにしろ竹村のところは乳飲み子（ちのみご）を含めて四人の子供がいた。

磐音や柳次郎のように日独り身ではない。

それだけに背に腹はかえられずに無心に来たのであろう。

「品川殿と図って、即刻（そっこく）なんとかいたします。

由蔵が頷いた。

「お二人さん、食事の支度ができましたよ」

おこんが顔を覗かせた。

由蔵は岡倉家に出向いて、食事はまだだった。だが、磐音はすでに終えていた。

「それがしは…」

「坂崎さんもひと働きなされて小原が空かれたでしょう。用意してあります」

「それはかたじけない」

磐音はニッコリと笑っておこんに感謝した。

二人は台所の板の間に行った。すでに小僧の宮松が膳の前に座って食べていた。

「お先に頂いております」

「宮松も腹が空いたでしょう、たんと食べなされ」

由蔵が小僧の労を労った（ねぎらう）。

大人二人の膳には酒がついていて、おこんが酌をしてくれた。

「これはなにより」

由蔵が一口嘗めるように飲むと、

「いやはや坂崎様とご一緒すると肝を冷やすことばかりです」

と苦笑いした。

「老分さん、それは坂崎様のせいではありませんよ」

おこんが磐音に代わって言った。

磐音はゆっくりと酒を楽しんでいた。

「確かに岡倉様に金子を用立てたうちが悪い。だが、なにしろこのお方は風雲を呼ぶ相を持っておられる。

老分と同席してたべる小僧の宮松が早々に飯を掻き込んで。

ご馳走さまでした、おこんさん。

と箱膳を流しに運んでいった。

宮松が台所の広い板の間から消えるのを確かめた由蔵が、

「坂崎様は、豊後関前藩中老職六百三十石を次ぐ嫡男にございますそうな」

とふいに言った。

磐音は手にしていた杯を止め、おこんを見た。

おこんには江戸に出てきた経緯を話していた。

おこんが顔を横に振り、由蔵が言い出した。

「上野伊織様がおいでになったとき、根掘り葉掘り（ねほりはほり）詮索（せんさく）しましたな、つい坂崎様の境遇（きょうぐう）やら諸々（もろもろ）を漏らされましてな。そのあとにおこんに尋ねたら、おこんも坂崎様からすでに聞いておったという。」

そうでしたかと磐音は納得した。

「店で知っているのは吉右衛門様と老分さんと渡しだけなの」

おこんが言い、由蔵が言葉を添えた。

「坂崎様、お怒りになっちゃいけませんよ」

「そのようなご懸念は無用に願います」

「いえね、御藩の勘定方上野様もそれなりに計算があって漏らされたことにございますよ」

「伊織が計算ですか」

「今津屋に集まるのは金ばかりではありません。豊後関前藩の内情を知ろうと思ったら、たちどころに調べてご覧にいれます。そのことを勘定方の上野様は承知なさっておられたから、坂崎様のご身分やら事件やらを話されたのです。」

「老分どのも我ら幼馴染が相戦う羽目になった背後には、何かの意図があってのことと思われますか」

「私が今言えることは、豊後石前半には表にでない借財がかかりあるということです。借金野崎は大阪の両替商天王寺屋五兵衛に八千両、近江屋（おうみや）彦四郎に三千五百両、江戸京橋の同業、藤屋（ふじや）丹右衛門に五千両と、都合一万六千五百両の額に登りますな。これに利息が加わりますから大変な額になりますな」

磐音は呆然とした。

江戸藩邸に三年勤番した磐音も、全く与り知らず（あずかりしらず）借財であった。

藩では大阪の蔵元備前屋考右衛門に銀二千六百貫（およそ四万二千両）の借財があった。それに蔵前の札差し伊勢屋源八（げんぱち）に三千八百両の融通を受けていた。

これらの借財の総額は関前藩の実高三年分に当たった

磐音の父の正睦は、この借財をおよそ十年で返却する計画を立てた。

そのために自藩で得られる物産を藩の物産所に集荷させて、大阪、江戸に海運で一手（いって）に運び、利益を上げることを軌道に載せたところだった。

この企てを磐音ら江戸勤番の若手が帰国してさらに推し進める、その矢先の騒ぎであったのだ。

もし由蔵の言うことが正しいとすれば、更に一万六千五百両の借金がかさむことになる。いや、問題はだれが何のために借金をおったかだ。

「坂崎様、今少し時間をいただければ詳しく調べることもできます」

「関前藩を黒い鼠が徘徊刷るに任せておいてよいのですか」

由蔵が言った。

「私の勘も、坂崎さんたちの帰国をよからぬことと思っていた者たちが汚い手を使ったと言っているわ」

とおこんも言葉を添えた。

磐音は無言のうちに由蔵に頭を提げた。すると由蔵が胸をぼーと叩いた。

階段下の四畳に布団が敷かれ、磐音の寝所になった。

磐音が行灯の明かりで上野伊織の手紙の封を切った。

＜取り急ぎ一筆認め候（したためそうろう）去年の修学会中止の命をくだされたのはお直目付の中居半蔵様と判明致し候。また昨日江戸屋敷に国許より次席江戸家老として宍戸有朝様がご着任、国家老宍戸文六様の息子がかかった江戸藩邸宍戸派の強化かと考えおり候。また、江戸屋敷、国表ともに近く大幅な人事一新があるとの噂が江戸屋敷に広まり、藩士一同落ち着きをなくしおり候。ただし我ら軽輩の者にはまずは御役異動など無縁にござ候故、幹部方の慌てふためきぶりを腹の中で苦笑いしつつ監察しおり候　　伊織＞

お直目付は禄高（ろくだか）七百石で、江戸家老、留守居役ら幹部諸職のしごとぶりを監察する役目であり、関前藩では殿様近くの御奥番頭を兼ねていたから、一番恐れられる役職といえた。

中居半蔵は厳正中立の士として知られ、宍戸文六らを頂点とする守旧派とも若手の藩政改革派とも一線を画して、双方を見守ってきたという記憶が磐音にはあった。

次席江戸家老として宍戸有朝が着任したのは、江戸家老の篠原三左が老齢になったことと、篠原家に嫡子不在で後継がいないことへの備えと思えたが、有朝は文六の末弟（まってい）で、当然のことながら宍戸派の中心人物の一人だ。

（はてさてどうしたおのか…）

関前藩と縁を断ったつもりが、今また争いの渦中に巻き込まれようとしていた。

磐音は行灯を吹き消すと布団の上に横になった。

深川の北割下水は貧乏御家人の住む一帯として知られていた。

永の無役の品川家の門扉（もんぴ）は、仲間壊れかけて風にがたがたと鳴っていた。

「ごめん、柳次郎どのはおられるか」

磐音が門の奥に向かって叫ぶと当の柳次郎が、

「坂崎さんか、上がれと言いたいが外のほうがせいせいする」

と無腰のまま出てきた。

「今津屋で仕事です」

「しめた」

柳次郎はだいぶ手入れを放置された屋敷に走り込み、すぐに袴だけを着け、大小を手に飛び出してきた。

「今度もまた用心棒ですか」

北割下水を歩きながら磐音は昨夜の一件を説明した。

「なんと甲府勤番の三千七百石と喧嘩騒ぎですか」

俄然、柳次郎が張り切った。

御家人はお目見え以下、無役とくれば直参と言っても数にも入れてもらえない。

それだけに旗本の高家に対して張り合いたい意地があった。

「品川さん、ちと問題がある」

磐音は竹村左衛門が今津屋に無心に行った一件を告げた。

「竹村の旦那、酒を飲みたくてたかりに行った」

柳次郎が嘆息した。

「とっちめてやりたいが、なにしろ子沢山の貧乏人だ。気持ちもわからんではない。坂崎さん、どうすればいい」

「由蔵どのに頭を下げて、竹村さんにも仲間に加わってもらおうと思う。その日当ての中から、融通してもらった金を差し引くというのは」

「それができますか」

「ならば竹村三の長屋を訪ねるか。坂崎さん、驚いちゃいけませんよ」

「貧乏長屋ならこれまでも沢山見てきました」

柳次郎がにたりと笑って、割下水を飛び越えた。

溝と路地が撚り合わさるような界隈（かいわい）を柳次郎が長屋の臭いと混じり合って、なんとも言えない独特な臭気（しゅうき）が磐音の鼻を襲った。

小さな広場にある井戸では女たちが群がって洗濯をしていた。どれもが黄ばんで継ぎのあたったぼろばかりだ。

柳次郎はすでに干された洗濯物を掻い潜って更に奥に進んだ。

このところ雨が降っていないせいで、迷路（めいろ）の路面からは埃が風に舞い上がっていた。

割下水には南と北があった。

単に割下水と呼ぶとき、南を差した。

旗本諸家が屋敷を連ねる南に対し、北割下水は下級武士、貧乏御家人の住む一帯であった。ところが南にも、北を凌ぐ貧乏人の住む地帯が吉岡町の裏手にあった。

南割下水吉岡町のどんづまりに竹村武左衛門の住む半欠け長屋はあった。

木戸もなければ北壁も満足に残っていない。

板屋根は波打ち、雨が降ったときの悲惨さが磐音にも想像がついた。

「勢津（せいづ）どの、竹村さんはおられますか」

勢津は洗濯物を干していたが、慌てて磐音と柳次郎に頭をさげた」

「お前様、品川様と坂崎様か」

妻女の声を聞いた武左衛門が、よれよれの単衣（ひとえ）に襷掛け（たすきがけ）で、手に刷毛（はけ）を持って出てきた。袋貼り（ふくろばり）の内職をしていた風情（ふぜい）だ。

「仕事だ、今夜は戻れぬ」

頷いた竹左衛門が長屋に消え、その代わりに子供が二人顔を見せた。

長女の早苗（さなえ）八つと長男の修太郎（しゅうたろう）五つだ。

「品川様、ご苦労にございます」

早苗がつんつるてんの着物の丈を気にしながら挨拶した。

「父上は仕事じゃ、留守を頼むぞ」

柳次郎とは親しい仲とみえて、柳次郎も二人に声をかけた。

「おお、そうじゃ。このお方はな、父上の朋輩の坂崎磐音様だ。これからも顔出しされるやもしれぬ。早苗、修太郎、頼むぞ。」

柳次郎の言葉に早苗がしっかりした視線を磐音に向けて、

「よしなにお付き合いください」

と挨拶した。

「それがしのうこそ、よろしく頼み入る」

磐音が頭を下げたところに、羊羹色（ようかんいろ）になった袴の腰に塗りの剥げた大小を差した竹村武左衛門が姿を見せた。

その顔は長屋から出られた解放感に溢れていた。

三人は溝を飛び越え、北割下水で戻ってきた。

「竹村さん、仕事は今津屋だ」

柳次郎がふいに言った。

すると武左衛門の足がとまり、困惑の顔を見せた。

「竹村の旦那、今津屋の老分に無心に言行ったそうだな。そいつは禁じ手だぞ」

柳次郎がずばりと言った。

「すまぬ、柳次郎、坂崎さん」

竹村武左衛門が頭を下げると、

「一番したの子が熱を出しおってな、医者に診せようとつい…」

「竹村の旦那、おれにそんな嘘は通じないぜ。勢津どのに隠れて酒を飲みたかっただけであろうか」

「すまぬ」

「竹村さん、稼ぎはないものと覚悟してください」

「坂崎さん、相分かった。以後、かようなことは絶対にいたさぬ。金打してもよい」

北割下水で刀の鍔（つば）を差し出した。

金打とは、武士同士が約束を違えぬとい誓いに刀の刃や鍔など金属う打ち合わせることだ。

「北割下水で金打もないもんだ」

柳次郎が吐き捨てると、

「貧乏侍には貧乏侍の意地があらあ。今津屋は坂崎さんを信じておるのだ。その仲間を裏切っちゃならねえよ。

と伝法な口調で言い、さっさと歩き出した。

武左衛門が面目な誘うな顔で従い、そのあとを磐音がのんびり行った。

由蔵は竹村の一件を了解してくれた。

三人の日当はサンドの飯付きで一分と決まり、竹村は差し当たって５日分の稼ぎはなしということになった。

三人が交替で今津屋の用心棒に入って３日は何事も無く過ぎた。

甲府勤番に決まった旗本三千七百石の岡倉美作守恒彰は沈黙を守ったままだ。

「こりや、考えすぎでしたかね」

由蔵が磐音に言った後、磐音は由蔵の供で別口（べつぐち）の借金の取り立てに回った。

同じ旗本お徒組（おかち）頭二千石、大久保播磨（おおくもはりま）守忠義（ただよし）の愛宕（あたご）の屋敷だ。

用件はすぐに済んだ。

用人が百五十両を用意していて、

「由蔵、すまぬが本日はこれで勘弁してくれ」

と先手（せんて）を取られた。

「大久保様には本日までに三百両の返済をお約束してございましたが、あちらから頭を下げられるとなんとも腰砕けだ。

帰り道、由蔵が苦笑いした。

「まさか岡倉様の一件が外に漏れたということもないと思うが…」

由蔵は独り言を呟いた。そして、視線を磐音に向けた。

「坂崎様、豊後関前藩がなぜ一万六千五百両も借金したか、調べがつきましたよ」

「つきましたか」

「一昨年の暮れ、江戸家老藤原三左様の名で借り受けられた金は、材木相場に注ぎ込まれております」

「材木相場ですとな」

天領飛騨（ひだ）のお留め山から切り出された膨大な材木を、美濃（みの）太田宿の材木問屋濃尾屋を通して藤原様はお買いになり、明和八年の暮れに江戸に運びこまれて貯木（ちょぼく）なされた。なかなか目端（めはし）の利いた御仁ですな」

老い衰えた藤原三左をしらない由蔵が言って笑った。

「翌明和九年２月二十九日、目黒の行人坂から出火（しゅっか）して江戸を焼き尽くす大火となりました」

（そうか、そうだったな…）

この言葉に磐音は息を呑んだ。

もしそれが事実なら、一万六千五百両分の材木は五倍にも十倍にも高値（たかね）を呼んで、関前藩は大儲けしていたはずだ。

「ところが貯木されたのが麻布（あざぶ）の借り上げ屋敷、目黒の火がたちまち貯木に移って、大損（おおぞん）の大火傷を負ってしまった。

「なんと…」

「武家の商法はうまくいかないという見本（みほん）です」

坂崎磐音はその時分、江戸屋敷に勤番していたが、全く与り知らぬ（あずかりしらぬ）ことであった。

「まあ、京橋の藤屋丹右衛門様の老分番頭を紹介しますから確かめてごらんなさい」

と由蔵は唆すように言った。

三

翌日の昼下がり、豊後関前藩勘定方の上野伊織が、愛宕（あたご）権現社の急な石段（いしだん）を息を弾ませながら上がってきた。

家康公の守護将軍尊像を安置した愛宕権現は、慶長八年に社殿が完成、江戸で火伏（ひぶせ）の神として信心されていた。

愛宕権現の名物はこの八十六段の急な石段と、その石段を曲垣平九郎が馬でのぼったという伝承であった。

伊織を迎えた磐音の目に、石段の下に品川柳次郎が立っている姿が小さく見えた。

磐音が駿河台の藩邸から伊織を呼び出してくれた柳次郎に手を振るうと、柳次郎も手を振り返して両国西広小路に戻っていった。

「駿河台近くでは差し障りがあろうかと、愛宕まで遠出してもらった。用心にこしたことはないからな」

「磐音、なにかあったか」

伊織が訊いた。

「そなたに訊きたいことがある」

と言って磐音は拝殿（はいでん）の前に進み、豊後関前藩の安泰と藩主福坂実高の健康を祈った。

伊織も真似た。

石段のかたわりに甘酒（あまざけ）の暖簾がかかった茶屋があった。

磐音はそこに伊織を連れて行った。

「甘酒をくれぬか」

老婆に注文すると、磐音は桜の木の下に置かれた縁台（えんだい）に伊織と並んで座った。

「伊織、今津屋の老分どのが気になることを調べてくれた…」

と前置きして、由蔵が話してくれたことを伊織に告げた。

伊織は息を飲んで話を聞いていた。

「今日、ここへ参る途中、京橋の両替商藤屋の老分久兵衛どのに会って、確かめて参った。久兵衛どのは、今津屋の口添えゆえに事実がどうかだけは返答するが、商いには守密も大事、詳しいことは言えぬと申されてな」

勘定方の伊織が頷いた。

当然の答えであった。藤屋は今津屋の老分由蔵の口添えがなければ、面会にも応じてはくれなかっただろう。

「磐音、事実であったか」

「藤屋に五千両の借財を関前藩が負っていることは事実であった。むろん、利息が加算されると額はもっと大きくなる」

「なんと…」

伊織はしばらく絶句して考えこんだ。

運ばれた甘酒から静かに湯気（ゆげ）が立ち上っていた。

磐音は甘酒を口に含んで気を鎮めた。

伊織も無意識のうちに真似た。

「勘定方のおれが知らぬ借金が一万六千五百両もあったとはな。それが老齢の藤原様がお借り上げになったとはとても信じられぬ」

「藤原様はここ数年病がち、寝たり起きたりの暮らしであることは藩邸のだれもが承知のことだ。その藤原様が大阪や江戸の商人から大枚（たいまい）の金子を借りて、美濃の材木問屋と交渉して天領の材木を買い上げ、値上がりを待つなど大技（おおわざ）を振るえるものか。江戸家老の名を借りて、動いた者がいるということだぞ」

「ともあれこのようなことができるのは、江戸屋敷でも数人の重役方だけだ。」

「藩主の実高様もご存じあるまいか」

「間違いなく…」

と答えた伊織が、

「磐音、調べる。しばらく時間をくれ」

決然と言った。

「こいつは慎重を要する。くれぐれも気をつけて行動してくれ」

伊織は緊張した面持ち（おももち）で磐音に頷き返した。

二人はしばらく沈黙したまま、冷めかけた甘酒の残りを飲んだ。

「磐音、次席家老に宍戸有朝様が着任されて、江戸藩邸の権限は一気に宍戸派が握った感があってな、戦々恐々としておる」

「なんとのう」

「修学会に出ていた若手の連中が毎日何人も宍戸有朝さまの御用部屋に呼ばれて、根掘り葉掘り、問い質された上にきついお叱りをうけておる最中だ。そのうちおれにも呼び出しがこよう。」

「恐怖政治ではないか」

「実高さまは国表、江戸家老は全くお気付きでない」

伊織はぼやいた。

「反宍戸派の方々はどうしておられる」

「殿に同道して国許に戻られ、頼りになる方々がおられぬ」

「宍戸文六様はそれを計算して動かれているのであろう」

「殿が参勤交替で江戸に上がってこられるまでには、江戸はすっかり宍戸派に乗っ取られ牛耳られておるぞ」

「お直目付き中居半蔵様は動かれぬか」

「半ば居眠りしてござる」

と答えた伊織が、まさかと呟いた。

「磐音、中居様も宍戸派に取り込まれたということはあるまいな」

「さてそれは…」

藩外に離れた磐音にはなんとも答えようがなかった。

「とにかく宍戸有朝様に呼ばれたら、知らぬ存ぜぬで通せ」

「おれは勘定方で惚けの伊織と呼ばれておるからな。馬鹿面でべこべこと頭を下げてこよう」

そう答えた伊織はなかなかの能吏である。そのことを磐音は修学会を通じて承知していた。

「能ある鷹は爪を隠す、それに越したことはない」

頷いた伊織が立ち上がると、先に参ると言い残して石段を下がっていた。

磐音は四半時も茶屋であれこれと考えた後、店を終える支度をする老婆に茶代と心付けを払った。

「お侍様、またおいでくださいまし」

老婆の声に送られて愛宕権現から江戸市中へと下がっていた。

坂崎磐音が両国西小路米沢町の両替商今津屋の前に辿り着いたとき、店の中から怒鳴り声が響いてきた。

店の前には通りがかかりの人間やら出入りの客やらが立ち止まって、中の様子を覗き込んでいた。

「わが先祖（せんぞ）が関ヶ原（せきがはら）の戦いにて敵方の武将を討ち取り、槍の穂先に吊して戦場を駆け回るうちにかような干し首になったもの、わが屋敷の家宝である。金子に困ったによって恐れ多くも担保（たんぽ）に差し出し、五百両を融通してほしいと頼んでおるのだ。今津屋も両替商の分銅看板を掲げておるのなら、素直に五百両を差し出せ」

「うちはお客様の担保に金をお貸ししているのではありませぬでな、信用でお貸ししているのでございます。お断りいたします。」

老分の由蔵のきっぱりした声が応じた。

「担保がいらぬとな」

「はい、要らぬ場合もございます」

「ならばこの干し首なしに金子をようだててもらおうか」

「ですから、あなた様方いは信頼がおけませぬのでお断りすると申しているのですよ」

「番頭、神君東照宮様いらの家柄、直参旗本細井且村に向かって吐かしおったな！」

「細井さんとやら、直参旗本が強請りたかりをしちゃいけねえな」

品川柳次郎の声が加わった。

「用心棒風情が旗本千九百石に向かって、強請たかりともうしたか」

「おまえさんちは千九百石かい。うちは北割下水の貧乏御家人だが、まだ強請りたかりには落ちてないぜ」

今日の柳次郎は気合が入っていた。

お目見（まみ）以下の御家人の次男が大身（たいしん）旗本に対抗しようというのだ

意地の問題であった。

「津金陣の助、かくなる上はかまわぬ。無礼な今津屋の根性を叩き直すまでじゃ、ひと暴れいたすぞ」

「おおっ！」

数人の気が呼応（こおう）。

磐音は、

「ごめんくだされ」

と見物の群れを掻き分けて、今津屋の広い店先に入った。掻き分けて、今津屋の広い店先に入った。

派手な羽織を北大男が朱鞘の柄を片手で叩いていた。

仲間はそのものを入れて五人だ。

磐音の見知った顔が一人いた。

今津屋の店の上がりかまちに皺くちゃの首らしきものが置かれていた。

刀の柄に手を掛けて対決していた品川柳次郎がほっとした顔をした。

竹村も緊迫の表情で柳次郎の後ろに控えていた。

「やはり岡倉様の仲間ですか」

のんびりとした磐音の声が、とげとげしい店先の緊張を緩めた。

「細井様、こやつが今津屋の用心棒にございます」

先夜（せんや）、磐音と立ち合った刀を神田川に弾き飛ばされた若侍が津金陣の助だった。

六尺余の痩身の細井且村がじろりと言わねを睨んだ。

年の頃は三十五、六か。腰のすわり具合はなかなかである。

磐音はにっこり笑って終えた。

「細井様、今宵は商い成り立たず、人形の首を持ってお帰りくだされ」

「人形の首と申したか」

「では干し首をお持ち帰りくだされ」

「商人の用心棒ごときが直参旗本に指図いたすか」

「直参旗本、直参旗本と馬鹿の一つ覚えみてえに叫ぶ度に、上様のお名を汚しているということが分からねえのか！」

磐音が戻ってきて更に勢いづいた柳次郎が啖呵（たんか）を切った。

津金が剣を抜いた。

仲間も抜いた。

細井の剣はまだ朱鞘の中だ。余裕綽々（しゃくしゃく）として今津屋の高い天井を見上げながら、

「津金、円明流の細井且村が差し許す。好きなだけ暴れよ」

と言い放った。

円明流が尾張藩に広まった剣というくらいしか、磐音には知識がない。

「細井様、お相手つかまつる」

磐音は痩身旗本の前に進み出た。

細井は羽織を悠々と脱ぐと、赤糸を巻いた柄んに手をかけてそろりと剣を抜いた。

「わがご先祖が関ヶ原をはじめ、数々の戦場を往来して的の兜首を上げてきた。三条宗近の錆の一つに加えてくれる」

磐音は静かに大包平を抜くと峰に返した。

「若造、峰に返す必要などない、遠慮無く参れ」

「お手柔らかに願います」

磐音は居眠り剣法そのままにのんびりと、峰に返した金原を地擦りにつけた。

するとその回りにのどかな春風がそよ渡っていった。

「旗本八万騎の中でも武勇を讃えられた細井一族に対し、かようにも愚弄いたすとはいい度胸だな」

且村の顔が朱に染まった。

柳次郎と竹村、津金立ちの二組は、刀を構えて対峙したまま見物に回った。

且村が三条宗近を正眼から上段に移し、息を溜めた。

「ふあっ！」

荒い息が吐き出され、痩身は暴風のように磐音に襲いかかった。

眉間に落とされた宗近を地擦りの包平が払い、優しく包み込むように絡み合った二剣を支点に、体の位置を変えた。

「おのれ！」

宗近を強引に手元に引き寄せた且村は、磐音の小手斬りを鋭く狙ってきた。

その連続した攻撃を磐音が撥ね、受け、合わせた。

左右の小手斬りの連鎖のあと、円明流の胴斬りへと流れるように移行した。

磐音はふわりと、宗近の切っ先の寸余先を外に逃れ出ていた。

再び間合いが取られた。

朱に染まっていた顔がどす黒く変わり、酒臭い汗が流れ落ちていた。

「細井さま、もはや無益な勝負にございます」

「さまざま言辞（げんじ）を弄しおって、もはや許せぬ。

且村が宗近を八双に構え直した。

磐音は正眼につけた。

且村が六尺の長身を伸び上がらせるようにして威圧の構えをみせ、一撃必殺の面斬りを見せて突進してきた。

その瞬間、居眠り剣法が豹変した。

低い姿勢から迎撃すると宗近の刃下に入り込み、迅速の胴打ちを送った。

ぼきり！

鈍い音が今津屋の店先に響き、且村は足をもつれさせて顔面から土間に崩れ落ちた。

脇腹の骨が何本かおれ、気絶していた。

磐音は包平を引くと津金に、

「津金どの、細井様とご一緒にお引き取りなされ」

と言った。

もはやその顔いは、いつもの春先の縁側に落ちる日差しのようにのどかな表情が漂っていた。

それが津金たちを萎縮させた。

刀を収めた四人の若侍が細井の手足を抱えた。

「津金様、岡倉の殿様にお伝え願えますか。これ以上無益なことをなさると今津屋としても出るところに出ますとな」

由蔵がぴしゃりと言った。

津金らはそれには答えず。

「どけどけ！」

と店の前の見物の群れを押しのけていった。

「これにて一件落着かな」

品川柳次郎が残念そうに呟いた。

「品川様、ご心配なく。。岡倉様が甲府にで出立（しゅったつ）なされるまでにはまだ数日の余裕がございます。それまではお雇いいたしますよ。」

「ありがたい」

柳次郎が嬉しそうに叫んだ。

その夜、磐音は金兵衛長屋に戻った。

まず一日に二度も岡倉の嫌がらせがあるとは考えられないからだ。そこで、柳次郎と武左衛門に今津屋での徹夜を頼んで、深川六間堀町に戻ることにしたのだ。

長屋の木戸口で青物の棒手振りの亀吉に会った。

厠（かわや）にでも言っていた様子だ。

「あれっ、旦那は今帰りかい」

「ああ、そうだが」

「旦那の長屋で人の気配がしたような気がしたんで、戻っていなさるとおもっていたんだが」

「いつのことか」

「半刻も前かね」

磐音は亀吉に頷き返すと時分の長屋の前に立った。

うちに人の気配はない。それでも柄に手をかけて障子戸を開けた。

わずかに煙草の臭いが漂い残っていた。だれかが侵入したとは確かだ。

「また泥棒かい」

亀吉が訊いた。

「はてな」

行灯の明かりを灯した。すると部屋の中がぼうっと浮かび上がった。

「荒らされてはいねえようだな」

亀吉が言い、急に興味を失ったように自分の長屋に戻っていった。

磐音は木箱に置かれた三柱の位牌を見た。

一通（いっつう）の手紙が残されてあった。

宛名は坂崎磐音、差出人の名はなかった。

磐音は行灯のそばに座して、手紙の封を切った。

＜坂崎磐音に申し渡す。そなたはすでに豊後関前藩に関わりあらず、あれこれと藩の内情に首を突っ込むこと不要と知るべし。その事を改めて警告す。すでに朋友の小林琴平、河出慎之輔、この世に非ず、両家とも廃絶せり。残りは坂崎家のみなり、この事に熟慮致せ。さらにはそなたの許婚（いいなずけ）小林奈緒、未だ豊後関前藩内に住みし事失念するなかれ　豊後関前藩有志（ゆうし）＞

なんということか。。

磐音が動き続ければ坂崎家を潰し、さらには奈緒に危害を与えると通告してきた者がいる。

さすがの居眠り磐音も慄えがくるほどに憤怒し、不安に落ちた。

坂崎の家は父の正睦がまだ壮健、なにより藩の重役の人であり、藩主福坂実高の信頼も厚い。

国家老の宍戸文六でもそうそう簡単に手を出せるわけもない。

だが、小林家は廃絶され、奈緒の兄琴平と姉の舞の二人が亡くなり、藩の擁護（ようご）を受ける立場から離れていた。それだけに奈緒の身が心配であった。（どうしたものか…）

磐音はその夜、まんじりともせずに一夜を過ごした。

夜明け前、大川端に出た磐音は懊悩（おうのう）を振り払うように大包平を振るった。振るい続けた。

それは肉体の限界を超えて二刻ほども休みなく続けられた。

両腕の筋肉が張り詰めて二尺七寸の長剣の保持が定かでなくなったとき、磐音の精神は冴々としてきた。

（脅かしなぞには屈せぬ）

その一事（いちじ）が磐音を奮い立たせた。そして、

（奈緒、無事でいてくれ）

と遠い地に生きる奈緒に届けと祈った。

四

穢土にも馥郁（ふくいく）とした梅の香りが漂い流れ、築波下ろしにも時折りだが仲春（ちゅうしゅん）の陽気が籠った。

今津屋周辺は数日間、平穏に時が流れた。

品川柳次郎が、甲府勤番に就いた岡倉美作の守恒彰一行が翌朝７つ発ちで甲州へ向かうと言うことを聞きこんできた。

「まずはひと安心にございましたな」

その知らせを聞いた由蔵がほっと安堵の言葉を吐いた。

「慣れば我らの仕事も終わるな」

「坂崎様、岡倉様は油断のならないお方、江戸を出られる明日まではお三人に働いてもらいましょうかな。夕餉には一本つけさせますでな」

武左衛門が嬉しそうに舌舐めずりした。

その夜、今津屋で徹夜した磐音はその足で宮戸川に回り、仕事を終えて六間湯でのんびりと湯をつかい、金兵衛長屋で昼過ぎまで眠った。

今津屋に出向いたとき、すでに８つを回っていた。

竹村武左衛門だけが神妙に四畳間で絵草紙をめくっていた。

「柳次郎は老分どのの付き添いでな」

その昼前、由蔵は品川柳次郎を伴い、掛取りに麻衣の交替寄り合いの松平主税（まつだいらちから）の屋敷へ出向たという。

「この仕事もあと数刻か」

武左衛門が溜息を漏らした。

無心した金をひかれても武左衛門の手には一両二分ほどが残る計算だ。子沢山の彼としては、もう数日仕事を続けたかったというのが本音だった。

「またなんぞありますよ」

独り者の磐音が呑気に答えたとき、小僧の宮松が、

「坂崎様、上野伊織様がお見えになっております」

と知らせた。

「すまぬがここに通してもらえぬか」

勘定方が両替商を訪ねたとしてもそう不自然ではあるまい。そう考えた磐音は宮松に頼んだ。

「はい」

と宮松が表に戻ると、

「それがしも外の空気が吸いたい」

と武左衛門が気を遣った。

「竹村さん、申し訳ございませんな」

「なんお、夕刻の酒が楽しみでな」

武左衛門と入れ替わりに伊織が階段下の四畳間に入ってきた。

「磐音、そなたは今津屋と昵懇の仲と申したが、布団部屋みたいなところに押し込められておるのか」

「あれか、すこしばかり見栄えを張ってみた。時折、用心棒を頼まれておるだけのことだ」

「そのようなことか」

伊織が浪人暮らしに苦労する磐音に同情の色を見せた。そこへおこんがお茶を運んできて、

「坂崎さん、ここではあんまりだわ。お客様を奥座敷へお通しなさいな」

と言い出した。

伊織が艶やか（あでやか）なおこんの姿に見とれた。

「おこんさん、ここのほうが気楽で良い」

「今津屋ではお武士様を階段下の行灯部屋に入れたとあっては、世間に聞こえも悪いわ」

おこんは困った顔をした。

「上野伊織にそんな気遣いは無用」

「そう、ここでいいのね」

おこんが盆の茶を上野伊織と磐音に供して、

「坂崎様にはひとかたならずお世話になっておりまして、今津屋とは家族同様の間柄にございます。今後も気楽にお訪ねくださいまし」

「と婉然とした笑みで挨拶して消えた」

「磐音、一体全体どうなっておる」

「うん、いろいろとな」

と答えた磐音が訊いた。

「それよりなにか起こったか」

「呼ばれたぞ、宍戸有朝様のところにな。有朝様の腹心、ご番組小頭の三田村平どのと徒士組の黒河内乾山も同席しておってな、いやはやそなたとのことをこっぴどく問いつめられ、修学会時代の付き合いを詮索された」

三田村平は神田三崎町の佐々木道場毛嫌いして、芝にある一刀流梶原魚妙道場で腕を磨いて、皆伝を得た剣士だ。また修学会の集まりをうさん臭く批判的に見てきた男でもある。

黒河内は宍戸派の三田村の腰巾着（こしきんちゃく）のように行動を供にしてきた。

磐音は、金兵衛長屋に忍び込み、置き手紙をする人物こそ黒河内ではあるまいかとふと思った。

「どう答えた」

「最初は惚けた面でとぼけようと思うたが、三田村が口を挟んでなかなかそうはさせてくれぬ。そこでな、坂崎磐音ら集まりの中心的人物とは身分違い、それがし、強引に誘われ集まりの端に加わったが、口も利いてもらえなかったと不満を漏らしてみた。まあ、なんとかその場は離れることができた…」

伊織が心からほっとした顔を見せた。

「だがな、三田村がそれがしらの行動は逐一見ておると脅かしつけおってな、これからも何度でも呼び出すと言いおったわ。それに…」

「…それになんじゃ」

「やはり江戸屋敷で大きな人事一新が行われるそうな。下っ端（したっぱ）のおれには関係あるまいと思うていたが、どうもそうではないようだ。まさか藩から放逐されまいが、殿が上府されるまでに宍戸は完全に藩邸を制圧するつもりだぞ」

（どうしたものか）

磐音はしばらく沈黙したが考えがまとまらなかった。

「伊織、また俺の長屋に押し入ったものがおる」

置き手紙の一件を話した。

「なんと、あからさまに正体を見せてきたか」

「名はないが関前藩有志（ゆうし）とあった」

「おれの見るところ、三田村に命じられた黒河内乾山あたりの仕業だな」

伊織も磐音と同じ考えを示した。

「黒河内はタバコ吸いか」

「あやつは尻の穴から煙がでそうなほどの煙草好きだ。」

磐音は部屋に煙草の臭いが残っていたことを告げた。

「黒河内に間違いないな」

「となれば伊織、いよいよそれがしとのつながりを相手に悟られてはならぬ」

ああ、と伊織が頷いた。

「当分会うのはやめるか」

「火急なことがあればここか、深川六間堀の鰻屋宮戸川に連絡をくれ」

頷いた伊織が、

「勘定方を辞めさせられるかもしれぬ。そこでな、近々お文庫に入って、例の一万六千五百両の借財の証文か書付を調べて見るつもりだ。藩勘定方の帳簿に記載されぬまでも、その証拠が残っておるやもしれぬでな」

「伊織、三田村らの目が光っておる、無理だけはするな」

「宍戸有朝さまの江戸次席家老着任を祝う宴が鉄砲洲の茶屋で近々催しされるそうな、江戸の宍戸派は全員でよう。その折、試みてみる」

「いいな、無理は禁物だぞ」

「承知した」

磐音はおこんを呼んで、伊織を今津屋に仕事に来た者のように送り出してくれぬかと頼んだ。よく考えれば豊後関前藩と今津屋には付き合いがない。いくら勘定方とはいえ、出入りは不自然だ。

おこんが二つ返事で引き受けた。

しばらくして上野伊織が今津屋の暖簾を分けて外に出た。すると支配人の和七が、

「上野様、お役に立てずに申し訳ありませんでしたな。これに懲りずにお付き合いのほどを願います」

と、さも商いの話で来たふうを装って送り出してくれた。

伊織もまた何度も頭を下げて返礼すると、浅草御門から柳原土手伝いに駿河台の関前江戸屋敷へと戻っていった。するとそのあとを二人の武士が尾行していった。

「造作をかけたな」

と磐音が支配人の和七とおこんに礼を述べた。

「なんの、大したことではありませんよ」

と答えた和七が

「老分さんのお戻りが遅うございますね」

と帰りの遅いのを気にした。

「まだ日も残っておるし、品川さんもついておるでな」

「そうでしたな」

磐音は四畳間に戻って、伊織のもたらしたことを改めて考えていた。

「坂崎様！」

支配人の和七の悲鳴が店に響いた。

伊織が戻って半刻もした頃だ。

包平も鷲掴み（わしづかみ）にした磐音が店に走った。

「坂崎様、投げ文が…」

和七は丸められた紙礫（つぶて）と煙草入れを手に持っていた。磐音が手紙をひったくって目を落とした。

＜今津屋老分由蔵と品川柳次郎の身を当方にて預かり候。今宵９つ坂崎磐音一人に千両を持参させ、麻布村宗善寺を来訪の事。金子と二人の身柄を交換致し候。町方目付に届け候時、二人の命は無きものと約定致し候　旗本組＞

和七は由蔵の煙草入れと一緒に紙礫（かみつぶて）が投げ込まれたと言った。

由蔵と柳次郎が囚われの身になったのは確かだ。

磐音は奥に向かい、主の吉右衛門に面会を求めた。

手紙を読んだ吉右衛門は、

「甲府勤番になられた岡倉恒彰様と考えてようございましょうな」

「まずは」

「今津屋の老分の命が千両とは安く見積もられたものよ」

とうそぶいた。

「今津屋どの、手紙の額面どおりに受け取って良いものでしょうか」

「坂崎様、どうなさるおつもりでございますな」

「千両を拝借して出向くしかありますまい」

すでに磐音の言葉はいつもののどかなものに戻っていた。

吉右衛門が頷き、

「お任せしてよろしいかな」

と訊き、今度は磐音が首肯した。

４つ過ぎ、千両箱を積んだ辻駕籠が今津屋の店先からでようとした。

「坂崎さん、それがしも同道できぬか」

竹村武左衛門が磐音に何度目かの嘆願をなした。

「竹村さん、ここは相手の言うとおりにせねば二人の命に関わる」

「駄目か」

武左衛門ががっくりと肩を落とした。

「頼みましたぞ」

という吉右衛門らの声い見送られた坂崎磐音は、辻駕籠に従って馬喰町の通りへと入っていった。

無住（むじゅう）の宗善寺は麻布村広尾原のただ中にあった。近くには百姓屋すら見ることができない枯芒（すすき）の原っばで、江戸市中よりも気温がぐっと下がったのが磐音にも分かった。

壊れかけた山門の向こうに明かりが見えた。

「ここでよい」

磐音は駕籠を山門前で止めると千両箱を駕籠から抱え上げ、方に担いだ。

「気をつけて帰れ」

駕籠屋の提灯が闇に溶け込むまで見送っていた磐音は石段を上がり、山門を潜った。

回廊の上に松明（たいまつ）が燈された本堂が浮かんで見えた。だが、人影はない。

磐音は左右から枯れたススキが垂れかかる石畳みを進んだ。

すると背後に人の気配がして、出口を塞いだふうがあった。

磐音は後ろを振り返ることはしなかった。その代わり、

「岡倉美作守恒彰様はおられるか」

と本堂の奥に声を掛けた。すると、巨漢の旗本が姿を見せ、階段の上に屹立した。

「お約束通りに千両を持参しました。由蔵どの、柳次郎どのと交換してくだされ」

磐音の声はあくまでのどかに広尾の夜に響いた。

「足下に置け！」

岡倉が命じ、磐音が従った。

「連れて来い！」

岡倉の声に由蔵と柳次郎が胸に縄をかけられ、後ろ手に縛られた姿で引き出されてきた。縄の引き手は風体の怪しげな浪人たちだ。

「坂崎さん、すまない。つい油断した」

と声を上げた柳次郎の顔は殴られた、青痣（あおあざ）になり、左目が半ばつぶれていた。

「多勢に無勢（ぶぜい）、抵抗のしようがあるまい」

由蔵は口をへの字に結んで、にこりともしなかった。

「岡倉様、二人をまずは解き放っていただこうか」

「千両を改めるのが先じゃ」

岡倉が合図すると二人の浪人が壊れかけた階段を下りてきた。

磐音は千両箱に片足をかけた。

「岡倉様、箱の中味を確かめるのはかまわぬ。それと一緒にお二人を、それがしの傍らに連れてきてもらおうか」

恒彰が手を上げた。すると縄の引き手が脇差しを抜くと由蔵と柳次郎の首筋に当てた。

「坂崎、そなたの腰の大小を鞘ごと抜いて足下に投げよ」

「お約束とはだいぶ違いますな」

「甲府赴任の道中をわざわざ向けて参ったはおまえを始末するため。腹の虫が収まらぬでな」

「不逞の浪人を雇って商人の番頭どのを連れ去るなど、直参旗本三千七百石の大身がなさることでは有りませぬぞ」

「坂崎、酒気（しゅき）が抜けると気が短うなる。こやつら二人の首を撥ね切れと命じるに何の躊躇いもせぬ」

恒彰の声が低いものに変わった。

「相分かった」

磐音は、

（どうしたものか…）

と思案しながら、ゆっくりと脇差しに左手をかけた。

「右手にて鞘を掴むのじゃ」

磐音のそばに立った浪人が命じた。

「さようか」

磐音の右手が脇差しを掴み、ゆっくりと抜いた。

磐音の右手が脇差しを掴み、ゆっくりと抜いた。

千両箱から片足を外した。

「時を稼いだ所で無益なことよ」

磐音は脇差しを千両箱の上にゆっくり置いた。

「太田、そやつの腰から自慢の長剣をぬけ」

苛立った恒彰が命じた時、柳次郎が、

「坂崎さん、包平を捨てちゃあならねえ。三人とも殺されるぞ」

と叫ぶと、首筋の脇差しに構わず浪人に体当たりした。

柳次郎の首に脇差しの刃があたって血が飛んだ。

「野郎！」

縄目を握っていた浪人がふいを衝かれて蹌踉めいた。が、かろうじて体勢を立て直すと柳次郎を反対に蹴り飛ばした。

上体の自由がきかない柳次郎が階段下に転がり落ちた。

そのとき、本堂の暗がりから飛び出してきた者がいた。脇差しを構えた影は、由蔵を引き戻そうとした浪人の背を峰に返した刀で叩いた。

「竹村さん！」

磐音は叫ぶと同時に包平に二尺七寸を抜き放ち、左右に切り分けていた。

「ぎえっ！」

「うおおっ！」

千両箱を確かめようとした浪人二人が倒れこんだ。

背後から殺気が殺到してきた。

この夜の磐音は居眠り剣法を忘れていた。

振り向きざまに憤怒の剣を切り分けた。

四、五人の剣の群れが磐音の素早い反撃にあって乱れた。

磐音は柳次郎の傍らに取って返すと、包平の切っ先で縄目を切って、

「品川さん、傷は大丈夫か」

「大したことはない」

磐音の脇差しを拾った柳次郎が階段を走り上がり、由蔵を守ろうとした。

回廊では武左衛門が恒彰と浪人者の二人に切り立てられて、壁に押し付けられていた。

「岡倉美作、そなたの相手はそれがしじゃ」

背に声をかけると、

「おう！」

と巨漢が振り向いた。

「直参旗本にあるまじき所行（しょぎょう）、覚悟めされよ！」

「おのれ、言わせておけば…」

巨漢の岡倉が片手斬りに太刀を振り下ろしてきた。

磐音の金平がすり合わせるように受けた。

「こやつ！」

柄に両手を掛けた岡倉が巨体を利して、ぐいぐいと、磐音を潰そうとしゃにむに押し込んできた。

磐音は絡みあった二剣をしてんにふわりと体を入れ替えた。

力任せに押し込んでいた岡倉美作守恒彰は磐音に躱されてたたらを踏むと、回廊から階段へ飛び出そうとした。

磐音が敏捷（びんしょう）にも恒彰の背後に吸い付くように迫り、大包平が虚空（こくう）を舞うと岡倉の背を斬撃した。

「うあああっ！」

背中を断ち割られた恒彰が悲鳴を上げながらも振り向いた。

その首筋を包平の切っ先が刎ねきって、血飛沫（ちしぶき）を飛ばした。

「うっ！」

どさり、と鈍い音を立てて、巨漢が崩れ落ちた。

「そなたらの雇い主は始末した。どうせ金で雇われた餓狼（がろう）であろう、麻布広尾原の棲家（すみか）にもどれ！」

磐音の叱咤（しった）に戦いは逆転した。

押し込まれていた品川柳次郎と竹村武左衛門が勢いづき、浪人たちは、

「ちくしょう、雇い主がしんだとよ！」

「銭にもならねえ、倒れた仲間を見捨てて寺領（じりょう）から姿を消した」

「いや、助かった」

「広尾原で骸になるかと思いましたよ」

ほっとして虚脱（きょだつ）した柳次郎と由蔵が、磐音と竹村に礼を言った。

「礼はそれがしではない、竹村さんだ。いや、それがしも助けられた」

磐音も頭を下げた。

「いや、柳次郎が死ぬのはかまわんが、老分どのには多大な迷惑をかけておる。このまま死なれてはそれがしも立つ瀬がない。そこで留守を命じられたにも関わらず、駕籠の明かりを目印に尾行してきたのだ。間に合ってよかった」

「そうでしたか、たすかりました」

磐音が改めて礼をのべると由蔵も、

「竹村さん、無心の一件は忘れましょう。日当もきちんとお払いしますぞ」

と言ってくれた。

「ありがたい。これで旨い酒が飲める」

「酒なんぞは浴びるほど飲ませてあげますよ」

と言った由蔵に磐音が、

「岡倉様をどうしたもので」

と転がる死体を見回した。

「坂崎様がおっしゃられたとおりですよ。大事な公務を抜けて、強請たかりをしようという持参旗本は、甲府に行っても迷惑千万なだけです。岡倉家はこれで廃絶違いなし。私どもが動かずともお寺社と町方がしかるべく始末をつけてくれます」

「ならば千両箱を抱えて、両国に帰りますか」

磐音の声が麻布広尾原にざわめく枯芒の葉音に優しく混じった。